

日本の詩歌

28

訳詩集

中央公論社

訳詩集

昭和44年6月15日初版発行

昭和48年8月30日5版発行

発行者 高梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

於母影	新声社訳	5
海潮音	上田敏訳	20
珊瑚集	永井荷風訳	58
沙羅の木	森鷗外訳	96
白孔雀	西条八十訳	113
牧羊神	上田敏訳	149
草の葉	有島武郎訳	181
月下の一群	堀口大学訳	204
リルケ詩抄	茅野蕭々訳	278

山内義雄訳詩集

289

新訳リルケ詩集 片山敏彦訳

309

カロッサ詩集 片山敏彦訳

316

海軟風 堀口大学訳

321

厄除け詩集 井伏鱒二訳

348

解説・鑑賞

河盛好蔵

安藤一郎

生野幸吉

訳詩集年表

索引

訳
詩
集

於母影

新声社

いねよかし バイロン

その一

けさたちいでし故里は
あをなばら 青海原にかくれけり
夜嵐ふきて魘あやきしれば
おどろきてたつ村千どり
波にかくるゝ夕日影
逐おひつゝはしる舟のあし
のこる日影もわかれゆけ



ジョージ・ゴードン・バイロン
卿 George Gordon Lord Byron
(二六八一—一八二四) イギリス浪漫派の
詩人、若くしてその名声をヨーロッパ
全土にとどろかせ、後世に世
界的影響を与えた。

バイロンは、その異常ともい
べき性格に、近代人の強烈な自我
の発露が見られるので、彼の所業
または行動が汗日に値する。

スコットランドの豪族の家に生
れ、名門校のハロウをへてケイン
ブリッジに学んだ彼は、十代の終
りからすでに詩を書いており、ま
だ在学中、十九歳のときに詩集

わが故郷ふるさともいねよかし

その二

しばし浪路のかりのやど
あすも変らぬ日は出でなん
されど見ゆるは空とうみと
わがふるさとは遠からん
はや傾きぬ家のはしら
かまどにすだく秋のむし
垣根にしげる八重やぶぐら葎
かど辺べに犬のこゑかなし

その三

こなたへ来よや我わがわらは
何とて涙おとせるか
穉こゝろごころに恐るゝは

『解意の時』(二八七)を出した。彼はびつこであつたが、憂愁をおびた蒼白の美貌で、放縦ほうじゆうな生活に浸り、女性との関係は生涯にわたつて乱脈をきわめた。二十四歳で上院議員となり、長詩「チャイルド・ハロルドの巡歴」の上梓じょうしによつて、たちまち詩人としてその名が喧伝けんでんされると、社交界で四、五人の上流夫人が次々と恋愛の対象になつた。貴族の娘であるアナベル・ミルバンクと結婚したが、一年たたぬうちに破綻はたんを來してしまつた。もう一つの事件は、異母姉オーガスター・リーと不倫の関係にあるという疑惑を受けて、人々の敵視と憎惡にくしみの的となつた。

バイロンが一八一六年四月からイギリスをあとにして、自発的亡命者となり、ヨーロッパ大陸を流浪しはじめたのも、それが原因だつたと言えよう。その間にも、多くの大作を書きつづけていたのは

沖のはやてか荒なみか
はらへ涙も世のうさも
この大舟おほふねはいと強し
翼にはこるはやぶさも
かばかり早くはよも飛ばじ

その四

あらきは海のならひとぞ
高き波にはおどろかず
サア、チャイルドな驚きそ
わが悲みはさにあらず
父にはわかれなつかしき
母には離れ友もなみ
世には頼まん人ぞなき
たのむは神と君とのみ

驚嘆すべきである。「チャイルド・ハロルドの巡歴」の後半を完成し、劇詩「マンフレッド」(二八七)、諷刺に富んだ大作「ドン・ジュアン」(二八三)、その他「シロンの城」(二八六)、「ベッギー」(二八八)、「マゼッパ」(二八五)等を書いた。

晩年はギリシアの独立運動に最後の情熱を注ぎ、一八二三年八月ギリシアへ渡り、翌年西岸のミロンギに本部をおいたが、四月に熱病のためたおれた。

わが国では、『文学界』の人々、ことに北村透谷、また土井晩翠などがバイロンを受説し、少からず影響を受けた。

「チャイルド・ハロルドの巡歴」(Childe Harold's Pilgrimage)は、四章から成り立ち、前半二章は一八一二年に出して、一躍詩人バイロンの名を高めたもので、第三章は一八一六年、第四章は一八

その五

父はいたくも泣かざりき
さすがに思ひあきらめて
されどまた世に力なき
母はなくらん帰るまで
あないとほしの我僮^{わがわらは}
涙のつゆぞうつくしき
心だにかく優しくば
わが目もいかで乾くべき

その六

こなたへ来よや我しもべ
色蒼^{あさ}ざめしは何故^{なにゆゑ}か
フランス人は来ずこゝへ
あるは寒さをいとひてか

一八年に刊行された。「チャイルド」というのは貴族の御曹子のこと、ここではバイロン自身に近く、ただ当時の嗜好に投じて中世風の偽装をほどこしているが、後半へ進むにつれて、主人公の性格はいっそう作者に重なってくるようである。

バイロンは、これを書きはじめたときは二十一歳で、脱稿したときは二十九歳であった。テーマは、チャイルド・ハロルドが周囲の世界に飽きて、また自分から逃れようと、ヨーロッパの各地をさまようとき、印象や感慨や思想を述べるのである。

第一章はポルトガルとスペイン、第二章はトルコ、第三章はベルギーとスイス、第四章はヴェニス、ローマ、フロレンスが舞台になっている。フランスの作曲家ベルリオーズは、これによって「イタリアのハロルド」をつくった。

サア、チャイルドよ弱りても

敵を恐るとな思ひそ

気色あしきはつれなくも

わかれし妻を思ひてぞ

その七

君が族のすみたまふ

浜辺にちかきわがとまや

ちゝは何処と子等は問ふ

妻の答はいかにぞや

といへど泣かぬ我しもべ

これもふさはし猛き身に

なんたちに似ずとつ国へ

われはたちけり戯れに

その八

ここで訳されているのは、第一章二節目だが、これだけで独立した作品と考えてもよい。ハロルドが故国を去るにあたって、別れを告げているところである。

「いねよかし」はおやすみの意味、この部分)、Childe Harold's Good Night と云われる。

「その一」「その二」「その三」はチャイルドのことば。

「その四」と「その五」の四行目まで侍童の答え。

「その四」「サア、チャイルド」は「チャイルド殿」(Sir Childe)という意味。

「その五」五行目から「その六」四行目まで再びハロルド。

こゝろ卑しき女をみなへし郎花

あだし人をや招くらむ

きのふ涙にまだぬれし

たもとも今日は乾くらん

泣かぬ我身ぞあはれなる

かくまでさびしき人や誰

われを泣かせんばかりなる

人のなきこそかなしけれ

その九

汐路しほぢにまよふ舟ふね一葉

身の行末もさだまらず

わが為に人なげかねば

人のためにもわれなかず

あだし主人の飼ふ日まで

声かしましく吠ほゆれども

「その六」五行目から「その七」
四行目まで待章。

「その七」五行目からずっと「その十一」までハロルド。つまり、ハロルドと侍童の対話のかたちになっていることに注意してほしい。

原詩もそうだが、「その九」「その十一」に深い哀惜とこれからの孤独にたいする感情が、波の上にただよう浮動となつて、余韻をひいて終るのである。

むかしの主の音をせで
帰らば嘯まんわが犬も

その十

舟よいましを頼みては
わが恐るべき波ぞなき
故里ならぬ国ならば

いづこもよしと極みなき
海に泛びぬ里遠み

陸に上らば木がくれし
むろにや入らん山深み
わが故里よいねよかし

ミニヨンの歌 ゲーテ



其 一

レモンの木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子^{かんじ}は枝もたわむにみのり
青く晴れし空よりしづやかに風吹き
ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く
くもにそびえて立てる国をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其 二

高きはしらの上にやすくすわれる屋根は
そらたかくそばだちひろき間もせまき間も

「ミニヨンの歌」(Mignon) は、ドイツ最大の詩人ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749—1832) の作で、一七八三年ごろのもの、小説「ヴィルヘルム・マイスターの修行時代」の第三巻のはじめにおかれ、少女ミニヨンが朝ヴィルヘルムの部屋の戸口でツィターに合せて歌い、それをヴィルヘルムがイタリア語からドイツ語に訳すということになっている。ミニヨンは、イタリア生れで、この歌にはふるさとへのあこがれが切々とこめられている。

訳者は鷗外の妹小金井喜美子(一八七〇—一九五七)とされている。彼女には翻訳、小説のほか、鷗外についての回想記がある。訳稿には当然鷗外の手が加わっているだろうが、その繊細なふるえや情感は女性のものである。日夏耿之介は「感情、形式まったく旧態を蟬脱して古風なる雅語の間自ずか

皆ひかりかどやきて人かたしたる石は
あみつゝおのれを見てあないとほしき子よと
なぐさむるなつかしき家をするやかなたへ
君と共にゆかまし

其 三

立ちわたる霧のうちに驢馬^{ろば}は道をたづねて
いなゝきつゝさまよひひろきほらの中には
いと年経たる竜の所えがほにすまひ
岩より岩をつたひしら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道をするやかなたへ
君と共にゆかまし

らなる異邦情緒のにおやかなひろ
ごりを見る。名手の作といわねば
ならぬ」と評し、北原白秋も「香
いはレモンの花とそよぎ、響はミ
ルテの風のように閑かに流れゆら
ぐものを感じさせた」と讃えてい
る。その形式は、十音のリフレイ
ンを持つ、十・十調というべきも
のだが、六音、四音、ときに三音
をまじえ、リズムには微妙な変化
があり、その全体がふしぎなバラ
ンスをたもっている。

原詩はドイツ人特有の南国への
あこがれを代弁するものとして広
く愛誦されたが、わが国でもフラ
ンスの作曲家シャルル・ルイ・ア
ムプロワーズ・トーマの歌劇「ミ
ニョン」(邦題「君よ知るや南の
国」)などを通じてあまねく知ら
れた。ただし、ドイツ語原作の作
曲はシューベルトのものをもっと
も名高い。薄田泣菫の「望郷の
歌」の「かなたへ、君といざかへ

ツウレの王 ゲーテ

昔ツウレ (Thule) に王ありき。

盟を渝へぬ此君に、

妹は黄金の杯を

遺してひとりみまかりぬ。

こよなき宝の杯を

乾しけり宴の度毎に。

此杯ゆ飲む酒は

涙をさそふ酒なりき。

死なん日近くなりし時

国の累の数々を

世嗣の君に譲りしに、

「まし」というリフレインにもミ
ニョンの面影がある。

「柑子」はオレンジの言いかえ、

「ミルテ」はオーストリア原産の
芳香をもつ木で、白色の花をひら
く。「人かたしたる石」は大理石
の像を意識したもの。

「ツウレの王」は「ファウスト」
第一部の「夕」のなかのパラード。
ファウストとメフィストがマルガ
レーテ (グレートヒエン) の部屋
に忍び入り、誘惑の手段として、
装飾品の入った小箱を置いて立ち
去ったあと、マルガレーテがもど
ってきて、寝支度をしながら歌う
歌である。そのあとで彼女は小箱
をみつめる。

トウーレは古代において北方の
伝説の島であり、この詩の雰囲気
には暗い北海の寂寥がただよって
いる。母殺し、私生児殺しの罪で
処刑されるグレートヒエンの悲劇